

保育者に求められる音楽表現力の育成に関する一考察

伊藤 仁美

The objective of this study is to clarify that DALCROZE method “Eurhythmics” helps for bringing up the Musical Expression Ability necessary for Nursery Teachers. By descriptions of students’ impressions, they are aware of picking up *the joy of music* through movement.

Keywords that they felt to obtain through practices are as follows.

“Communication” “Harmony of music and movement” “Variations of movement such as walk, run, gallop, and skip etc)” “Feel the rhythm by whole body” “the Musicality of nursery teachers”

“Relationship between music and other domains” “Music in childrens’ life” and etc.

Music through movement produces good results to experience music abundantly.

はじめに

保育者に求められる音楽表現力とは一体何か、と考えた時、これらは単一ではなく複合的な要素で構成されているといえよう。より豊かな音楽活動の世界に幼児をいざなうことの出来るピアノ演奏技能は、保育者にとって確かに魅力的なことではあるが、それは難易度の高いピアノ曲を完璧に弾きこなす演奏家としての技量が求められている、ということと同等のものではないであろう。かといって、保育者自身の音楽性、音楽能力が稚拙であってもよい、ということではない。幼児の音楽表現を伸ばさせていくには、様々な形で表れる幼児のひたむきな表現の芽に柔軟に対応できる音楽性、そして何よりも保育者自身の豊かな感性が求められるといっていよう。

ジャック＝ダルクローズ (Dalcroze, E.J., 1865～1950) が創案した「リトミック」は、身体の動きを通して音楽を感受する耳 (inner ear / 内的な耳 / 心の耳) を体得することを目指した音楽教育方法である。幼児の音楽行動は、日々の生活や遊びを通じた総合的表現である為、保育者は「音楽と動き」の観点を持って幼児の音楽表現について捉えることが必要であると思われる。このことから、筆者はリトミックアプローチの効用を通じて保育者に求められる音楽表現力を育成することを試みている。

筆者は、リトミックアプローチによる「身体表現を通して音楽を学ぶ」(Music through Movement) ことを授業で積み重ねることが、どのように保育者に必要な音楽表現力の獲得へと繋がっていくのかについて検討し、考察した¹⁾。本稿では、この先行研究での結果と研究課題を踏まえ、新たな実践事例の分析を通して、保育者養成校における望ましい音楽領域の指導方法について検討を

加える。

1. J＝ダルクローズの創案した「リトミック」の教育目的

ここでは、J＝ダルクローズの大著であるリトミック論文集「リズムと音楽と教育」の中から『音楽とこども』より幾つかの言葉を引用し、彼の創案した音楽教育方法「リトミック」の教育目的は何かを整理してみたい。

まずはじめに、「優れた聴取感覚とは何か」についてJ＝ダルクローズは以下のように述べている。

「一般には、聴いた音符の名前や、関係を区別できるだけで、良い耳とされていた。しかし、これは誤りである。というのは、いろいろな音高は、音の要素のひとつにすぎないからである。耳は、曲の調性的な緊張 (tonal intensity) の度合いや、強弱 (dynamics) や、音の連続の中での緩急や、音質や、我々が音楽の色彩と呼んでいる音の表現的性質 (expressive quality) のすべてを、区別できなくてはならない」³⁾

では、この「良い耳」を獲得するには子どもはどのようにして音楽的に教育されるべきか。そのことについて、彼は以下のように述べている。

「重要なことは、こどもが音楽を単に耳から吸収するのではなく、からだ全体で感じ取るように教育されるべきなのである。聴感覚 (aural sensations) は、それを完全にするために筋肉感覚 (muscular sensations)、つまり音の響きが浸透することによってつくられた生理的な現

象が必要である」⁴⁾

「何が音楽の表現を豊かにするのか。何が音楽の音の継続に生命を吹き込むのか。それは動きとリズムである。リズムのニュアンスは、聴覚と筋肉感覚によって同時に受け止められる」⁵⁾

上述した通り、J＝ダルクローズは自身が提唱する「良い耳の獲得」を目指したリトミック教育について、からだ全体の筋肉感覚を通して音楽を聴取し、音楽に呼応して動いてみるのが効果的である、ということを繰り返して述べている。一般的に、楽器を学習するということは、楽譜に書かれた音符や音楽用語を読譜し、表現豊かに演奏をすることである。音楽を愛好し、演奏表現をすることにおいて、音符、音楽用語の理解は必須であろう。しかし、幼児期におけるのぞましい音楽経験のあり方は、演奏技術の向上に重点を置いた音楽指導からではなく、むしろ音楽の基本的概念、音楽を彩る様々な要素を、まずはからだの動きを通して音楽表現することから始めることが先行すべきである。これらの活動、すなわちJ＝ダルクローズの言うところの「からだ全体で（筋肉感覚を通して）音楽を感じ取ることを通じ、聴覚を育成する」というリトミック教育の理念は、いわば幼児の心身の成長、そして音楽的発達の特性に則しておりまた、保育者養成校で学ぶ学生の音楽能力の育成にも効果をもたらすことが出来るのではないだろうか。

2. 先行研究における結果と課題

本稿での実践事例方法の検討を行う前に、まず先行研究においてどのような結果と課題がもたらされたのか整理しておく必要があるかと思う。

「保育者養成における音楽的表現授業に関する一考察（動きを通して音楽を学ぶことの効用と課題）」²⁾において、筆者は、音楽における根本的な要素である「リズム」をより具体的に知覚し、「身体は楽器」であるということの効果的に音楽経験することを目的とした「ボディパーカッション・アンサンブル」の授業実践を試み、授業事例を検証した。検証方法は以下の通りであった。

山田俊之作曲によるボディパーカッション作品「スターウォーク (Star Walk)」の楽譜を参照しながら、①楽譜の指示通りに「手」と「ひざ」を叩いて音を出し演奏した。②4～5人一組のグループとなり、リズムは楽曲どおりとするが、叩き方、叩く身体部分、動き、振り付けは自由創作として、独創性溢れるボディパーカッションの作品創作を試みた。③各々のグループによる作品を全体で発表し、同じ音楽からどのように異なった身体表現の作品が創られたか、他者の「音楽と動き」を観察し

た。④学生が本授業での学びをどのように捉えたかを把握するために、アンケートを実施した。

この授業では、「何故動くのか」「動きを通して音楽を学習することの意義」を、幼児の中に息づいている生活リズム、音楽リズムの事例を加えて理論的に補足説明をし、「動きっぱなし」だったり「動いて踊って爽快であった」という状態だけで学習を終わらせることないよう、留意した。その結果、「音楽を聴き、心で感受し、それを動きに表してみる」という学習構造がある程度習慣化された中で、学びを達成することが出来、ボディパーカッションの活動を通して、身体のだどのようなところを叩くとどのような音が鳴るのかを探索し（音色の吟味）、呼吸を合わせる間合いを感じながら他者と空間や時間を共有すること（アンサンブル）の気づきとなることがわかった。

その一方で、課題も浮き彫りになった。音色、ニュアンス、曲のテンポ、デュナーミク（音の強弱）、アゴーギグ（音の長短）等といった、音楽を彩る様々な要素や成り立ちをよく理解した上で音楽と向き合い、表現活動を深めることが出来るようになること、保育者にとって必要な音楽的感性をより豊かに育むことの出来る授業実践の検討である。

3. 「表現 I」の授業事例

本稿で報告する事例は、2009年夏期に筆者が担当したM大学通信教育学部における幼稚園教諭免許状取得を目指している学生のためのスクーリング、「表現 I」での授業実践である。

3. 1 講義内容および講義計画⁶⁾

「表現 I」

講師 伊藤 仁美

◆講義内容

本授業は「表現」に関する領域を音楽的表現の視点から学ぶことを目的とする。保育の営みの中における幼児の音楽表現は、日々の生活や遊びの中で芽生え、育まれていくものであるが、保育者は幼児から発信されるこの「表し」をしっかり受け止め、喜び分かち合い伸ばさせていくことが大切である。本授業では、「リズム遊び～リトミックアプローチ～」「わらべうた」「手遊び歌」「ボディパーカッション」「絵本と音楽」などの様々な音楽活動を体験していき、これらのことを通じて幼児の音楽的発達過程を理解し、豊かな音楽活動を援助する教育方法（保育方法）、内容についての実践力を高めていきたい。

◆講義計画

実技を伴ったワークショップ形式で授業をすすめる。

動きやすい服装（スカートは厳禁）、底の薄いシューズ、もしくは裸足での授業参加を求める。

1. リズム遊び（リトミックアプローチ）
2. 歌遊び（手遊び歌、わらべうた、手話ソング等）
3. 簡易楽器の演奏方法
4. 絵本と音楽
5. 「からだ」は楽器（ボディパーカッション）
6. 幼児の音楽表現とは、保育者に必要な音楽的感性、音楽的技術（基礎技能）とは

3. 2 事例の実践方法

本稿では、講義計画の1にある「リズム遊び（リトミックアプローチ）」での授業方法、内容を中心に事例研究を展開していくこととする。尚、授業は「世界の歌を遊ぶリトミック・ゲーム67選～ボディパーカッションから音楽表現まで～」⁷⁾を参考に、以下の通り実施を試みた。

□活動内容1「私たちの生活の中にごく自然にある動きを用いて音楽活動をしてみよう」

1. リズム遊び～リトミックアプローチ～

※（ ）内は活動のねらいを記述している。

(1) 手をたたく

- ①大きな円になり、一人1拍ずつ叩いてビートを回していく。慣れてきたら反対回しも行う。
- ②初めは音のない状態から、参加者のタイミング、リズムで叩いてみるが、次にピアノの即興演奏に合わせて1拍ずつ拍を叩いてみる。(ビートを感じ、他者と空間を共有していることの意識)

(2) 歩く

- ①自由に教室内を歩いてみる。(空間認識、自分の中にあるリズムへの覚醒)
- ②歩き回り、参加者同士目が合ったら挨拶を交わしてみる。(コミュニケーション)
- ③ピアノの即興演奏に合わせて歩いてみる。(音楽のビートを掴む)
- ④ピアノの演奏が鳴りやんだら、歩くのをやめて静止する。(即時反応)
- ⑤長調の音楽のときは前に進むが、短調の音楽のときは後ろに歩く。(調性感の聞き分け)

(3) 走る

- ①自由に走ってみる。(空間認識、自分の中にあるリズムへの覚醒)

- ②何かの状況設定の中で走ってみる。例：「熱い鉄板の上を走る」「冷たい氷の上の上を走る」「学校に遅れてしまいそうなので一生懸命通学路を走る」等（音楽リズムにドラマ性を織りこみより生き生きとしたリズムを表す）

(4) 揺れる

- ①2人で向かい合って手をつなぎ、8分の6拍子の音楽にあわせて左右に揺れる。(スイング感を味わう)
- ②2人で同様に手をつないでいるが、ピアノの高音の合図が聞こえたら、手をつないだままひっくり返り背中合わせになる。慣れてきたら、4人でも行ってみる。(合図の聞き分け、音楽に身を委ねて動く心地よさを味わう)

(5) スキップする

- ①自由にスキップしてみる。(片足で床を蹴りあげ、身体が上に行き一瞬浮く感覚を掴む)
- ②子どもの歌「やきいもグーチーパー」に合わせてリズム通りにステップする。(子どもの歌には、スキップのリズムが多く含まれていることに触れ、このことで躍動感をもたらすことを意識させる)

□活動内容2「きらきら星」を音楽表現しよう

1. 「きらきら星」(武鹿悦子作詞、フランス民謡)を歌う。

♪きらきらひかる お空の星よ まばたきしては皆を見てる きらきらひかる お空の星よ

2. リズムを叩く。

- (1) ピアノの伴奏に合わせて1人で歌いながらリズム通りに叩く。
- (2) 2人で向かい合って座る。長く伸ばす音符(2分音符)のところで、パートナーと手を合わせてみる。4分音符のところは、自分の膝を打つ。

3. 「きらきら星」のリズムを足でステップしてみる。

「きらきら星」(武鹿悦子：作詞/フランス民謡)

- (1) 自由にステップしながら歌ってみる。
 - (2) 皆が一同に同じ方向に歩いてしまいがちなので、一人ひとりが歩く方向を工夫してみる。
4. 「きらきら星」を構成している2つの音符（4分音符と2分音符）の種類に気付きながらステップする。
- (1) 4分音符のところは今まで通りリズムをステップし、2分音符のところは、近くにいる参加者と手を合わせてみる。
 - (2) 同じ活動を行うが、今度は手を合わせる際アイコンタクトもして、長い音符を身体全体で表す。
5. スカーフを使ってフレーズを感じながら音楽表現する。
- (1) 全体で1つの円になる。リーダーを一人決め、スカーフを持つ。皆で「きらきら星」の旋律を、ラララで歌う。スカーフを持ったリーダーはワンフレーズ分自由に歩き、フレーズが終わるところで、スカーフを誰かにそっと渡す。渡された者は、次のワンフレーズを歩き、またフレーズの終わりで違う参加者にスカーフを渡す。この活動を曲が終わるまで繰り返す。
 - (2) 慣れてきたら、リーダーを1人ではなく複数の者に（5～6名）決め、スカーフを渡す。今度は全体で1つの円ではなく、教室内の自由な場所にそれぞれが立つ。スカーフを持っている者は、自由に歩き回り、フレーズの最後で近くに立っている参加者の誰かにそっとスカーフを渡す。
 - (3) トーンチャイムのCとGの2音を同時に2分音符で鳴らし、伴奏を加える。ピアノの伴奏はせず、トーンチャイムの伴奏のみで、今までの活動を行う。

4. 結果と考察

4. 1 結果

受講生はリトミックアプローチによる「身体表現を通して音楽を学ぶ」(Music through Movement)の学びをどのように受け止めたのだろうか。本授業では授業の最終日(全6回)に、本授業での活動内容、ねらい、感想をまとめる課題の提出を求めた。その結果を表1、表2に挙げた。

表1 活動内容1についての感想(受講生の課題レポート記述より幾つかを筆者が抜粋した)

- ・授業を通して、歌ったりダンスをするだけでなく、手拍子や歩くなど何気ないしぐさでも音楽

に参加できることがわかった。手拍子は難しく考えることなく、幼児でもすぐできることなので、保育者と幼児のコミュニケーションにもなる方法だと思った。

- ・「音楽はなんと楽しいものだろう」「音楽に合わせて身体を動かすのは心地よい」と幼児に感じてもらえる保育を目指したい。
- ・リトミックで一番印象に残ったのは、スキップである。大人になっても、楽しいと思える動きであることが意外であり、発見であった。身体全体でリズムを感じると、心と身体の深い部分にまで浸透していくことが実感できた。しかし冷静に考えると、それは、指導者の美しい動きに合わせたピアノ即興演奏と、声かけがあったからこそのものであり、あらためて、保育におけるリトミック指導の難しさを垣間見た。
- ・音楽、リズムは他の4領域とも深く関わっていることを再認識した。「表し」は子ども一人ひとりで違うのだから、毎日の生活の中で子どもの実態を理解していかなければならないと強く感じた。
- ・日常、自然に行っている「歩く」「走る」「手を叩く」等といった動きに、リズムを変化させたり、感情表現を入れたり、他者と呼吸を合わせたりすることで、いろいろな表現の活動へと広がっていった。
- ・幼稚園、保育所では、音楽を楽しむ様々な環境が設定されているが、それらの音楽表現は特別なものではなく、まさに生活の一部であることがわかった。

表2 活動内容2についての感想(受講生の課題レポート記述より幾つかを筆者が抜粋した)

- ・歌を歌いながら歩くのはとても新鮮であった。スカーフを用いると動作に幅が広がることを感じた。その際、素材などはその曲のイメージに合ったもの(柔らかい雰囲気曲ではスカーフ等が適切であるが、活発な曲ではスティック等の硬めの素材を使う等)を使うことの大切さを学んだ。
- ・1つの曲「きらきら星」から歌う、リズムを叩く、トーンチャイムで伴奏する、ダンスをつける、といった様々な活動が生まれたことに感動した。音楽表現にとどまらず、これを他領域の表現として発展させていくなれば、お星さまを製作したり、お星さまに関する絵本を読んでみ

たり、劇遊びをしたり出来るのでは、と思った。
 ・「きらきら星」はゆったりとした優しい曲なので、ピアノも曲の雰囲気に合わせて弾くことに留意しなければと思った。そういった保育者の音楽観が保育の中では幼児に大きな影響を与えると授業を受けて感じた。スカーフなどを子どもに持たせてみると、今まで表現することが困難であったり恥ずかしい気持ちが先立っていた子どもでも、すんなりと表現の世界に引き込まれる場合があると思った。

4. 2 考察

保育者は音楽の美しさや楽しさを心で感受し、自分の持てる最大限の力で表現することの喜びを幼児に伝えたり共感したり、さらに発展させていく使命を担っている。とするならば、養成校における音楽科目の指導の在り方は、どのような視点を持ち、何に留意しながら「保育者に求められる音楽表現力の育成」に努めていったらよいのか。筆者は、日々保育者養成に携わる中で、これまで試行錯誤しながら実践を重ねてきた。一般的には、保育者にはある程度のピアノ演奏技術(ピアノ楽曲や子どもの歌の演奏、伴奏、コードネームを用いた伴奏、多少の即興演奏)が必要であるとされているし、保育者養成校において音楽科目は基礎技能として位置づけられている。また、幼稚園、保育所の就職試験では多くの場面でピアノやギター等の実技試験が設けられている。しかし、ピアノを始めとする楽器の演奏能力は本人のそれまでの音楽経験(ピアノレッスン経験の有無、ピアノ以外の楽器演奏の経験の有無等)によるところが大きいことも否めない。これらのことを踏まえ、本稿の実践研究を通して、浮き彫りとなった「保育者を志す受講生の音楽表現に関する気づき」について考えてみたい。

まず、表1における受講生の言葉から手がかりを得てみたいと思う。「手拍子や歩くなど何気ないしぐさでも音楽に参加できることがわかった。手拍子は難しく考えることなく、幼児でもすぐできることなので、保育者と幼児のコミュニケーションにもなる方法だと思った」であるが、このことは、ごくごく自然な動作や日常生活そのものが表現活動の源流である、という幼児の音楽の在り方への根幹に繋がっていく。「音楽はなんと楽しいものだろう、音楽に合わせて身体を動かすのは心地よい、と幼児に感じてもらえる保育を目指したい」については、音楽を聴き、からだ全体で音楽を表すことの楽しさを、この受講生自らが体感したことから書かれた記述であると考えられる。このことについて別の受講生は「…身体全体でリズムを感じる

と、心と身体の深い部分にまで浸透していくことが実感できた。しかし冷静に考えると、それは、指導者の美しい動きに合わせたピアノ即興演奏と、声かけがあったからこそそのことであり、あらためて、保育におけるリトミック指導の難しさを垣間見た」と記しているが、これは大変発展的な受講生の気づきではないだろうか。すなわち、「音楽はなんと楽しいものだろう。音楽に合わせて身体を動かすのはなんと心地よいことか」という感情が生まれるには、まず幼児にとって「思わず身を委ねたくなるような、一緒に歌い始めたり、動き出してしまいたくなるような」保育者の豊かな音楽表現力が、幼児と音楽を繋ぐ大きな仲立ちをしていることを指摘しているからである。このことは、本授業を通して体感した「動きを通して音楽を表現するリトミックアプローチ」の活動が、保育者にとってどのような音楽表現力が求められているかについて受講生自身が考える時の一助となっていると思うのである。保育者を志す者がピアノを弾く際は、幼児が歌っている姿や音楽に合わせて表現している様子を思い浮かべて演奏することが、とても重要ではあるが、このように幼児の音楽活動場面を想像しながらピアノを弾くことは(特に初心者にとっては)決して容易いことではない。慣れない演奏に振り回され、幼児の姿を思い浮かべながらピアノを弾くことよりも、間違えずに、止まらずに正確に弾く、ということに終始してしまうことも時々見受けられ、そうなる、学習構造として、「何のために」ピアノを学ぶのが明白になりにくくなってしまふ。本来根幹として一番重要な能力とされることは「幼児の心が弾んだり、和んだり、感動することのできる保育者のピアノ演奏(伴奏)、あるいは即興演奏」である。本授業において、受講生自らが音楽をからだ全体で表現することで、どのような音楽が幼児の表現意欲をかき立て、想像力を育てていくのか、という具体的なビジョンが見えやすくなったのではないだろうか。「音楽、リズムは他の4領域とも深く関わっていることを再認識した。『表し』は子ども一人ひとりで違うのだから、毎日の生活の中で子どもの実態を理解していかなければならないと強く感じた」は、幼児にとって音楽とは初等教育のような教科教育として単独で存在するものではなく、言葉、環境、人間関係、健康、といった他領域とも関わりながら、表現の領域の中で、育まれていくことへの気づきである。また幼児は感じたことを様々な手法、例えば時には歌で、時には絵画で、あるいは自分でお話を創ってみたり、即興的な劇遊びに発展したり、と思ひ思ひの形で表していくのが見受けられる。保育者は、それらを受容し、共感し育てていく役目を果たしていかななくてはならな

いのである。

次に、表2にまとめた受講生の言葉より、考察を加えてみたい。まず、「スカーフを用いると動作に幅が広がることを感じた。その際、素材などはその曲のイメージに合ったもの（柔らかい雰囲気曲ではスカーフ等が適切であるが、活発な曲ではスティック等の硬めの素材を使う等）を使うことの大切さを学んだ」についてであるが、幼児の末梢神経は大人に比べてまだ未分化であるし、心身全体が発達の途上にある。また、感じたことを自分のからだで表出することに内向的な幼児もいるであろう。表現活動の際、音楽のイメージに合った素材を持つことで、幼児の表現が、より想像力溢れる、豊かなものになっていく手助けをすることがあり、幼児自身も表現することの喜び、充実感を味わうことができる場合がある。本活動で使用したフランス民謡「きらきら星」は、ドからラまでの6音を使っており、冒頭の5度上行音程の部分以外は、滑らかに音程が下りていく柔和な曲である。スカーフを持った途端、幼児にとってそれがからだの一部となり、ヒラヒラさせたり、上にそっと上げてみることで、きらきら星が空に光っている様子、それを見上げ、憧憬や優しさの思いを感じる、そのような表現の広がりが見えたのなら、大変意義深いことであろう。「きらきら星はゆったりとした優しい曲なので、ピアノも曲の雰囲気に合わせて弾くことに留意しなければと思った。そういった保育者の音楽観が保育の中では幼児に大きな影響を与えると授業を受けて感じた。スカーフなどを子どもに持たせてみると、今まで表現することが困難であったり恥ずかしい気持ちが先立っていた子どもでも、すんなりと表現の世界に引き込まれる場合があると思った」と記述された部分も同様の考察が当てはまるであろう。「きらきら星」が柔らかくてゆったりとした印象を決定づけているのは、8分音符、16分音符といった速い音符が見当たらず、リズムは4分音符、2分音符の2種類のみで構成されているからであり、このような音楽を彩る諸要素、構成を分析した上で演奏することの重要性を、表現活動を通して意識するようになったと見受けられる。最後に「1つの曲、きらきら星から歌う、リズムを叩く、トーンチャイムで伴奏する、ダンスをつける、といった様々な活動が生まれたことに感動した。音楽表現にとどまらず、これを他領域の表現として発展させていくなれば、お星さまを製作したり、お星さまに関する絵本を読んだり、劇遊びをしたり出来るのでは、と思った」の記述であるが、これは表1にある、音楽、リズムは他の4領域とも深く関わっていることの重要性に触れたものと同様の気づきである。5領域の1つとして「表現領域」

が位置づけられているということ、それぞれが個々に独立して行われるのではなく、遊びや生活を通して、全ての領域の事柄が相互的に関わり、循環しながら育まれていくことを、幼児の音楽表現指導にあたる際、私たちは深く心に留めておかななくてはならない。

おわりに

本稿では、リトミックアプローチによる「身体表現を通して音楽を学ぶ」(Music through Movement) ことを通じて、保育者に求められる音楽表現力をどのように育成していくことができるか、について検討した。受講者の授業参加に対する意見聴取を通じて、保育者養成校におけるのぞましい音楽領域の指導法の一考察を論述してきた。これは、授業のねらい、方法、内容を立案した筆者の保育者の音楽表現力の育成への思いと、それを享受した受講生が感じた学びへの達成感とが、ある程度共通していなければならない必要性を感じたからである。「ユーリズミクスの目的は、かれらの課程の終了時に、『私は知っている』ではなくて『私は経験した』と、生徒が言えるようにし、自分自身を表現したいという欲求を心にはぐくむことである」⁸⁾とJ=ダルクローズはリトミック教育の目的について述べている。ここで実践した結果(表1・表2)から、受講生が自ら音楽を感受し、動きを伴った表現活動の経験を通して得た学びへの達成感、気づきと思われる記述が多く見受けられた。これらをキーワードで纏めてみると、「コミュニケーション」「音楽と調和することの心地よさ」「動きのバリエーション(歩く、走る、ギャロップ、スキップ等の)」「身体全体でリズムを感受する」「保育者の音楽性」「他領域との関わり」「生活の中の音楽」「表現への適切な援助、工夫」「表現活動の発展性」「音楽を構成する要素への理解」等に括られる。つまり、「リトミックアプローチによる身体表現を通して音楽を学ぶ」(Music through Movement) の指導は一定の効果が認められたといえる。

J=ダルクローズは、「リズムについて正確な身体表現のためには、実際はリズムを知的に把握しただけであったり、リズムを表現できる筋肉組織を持っているだけでは不十分であり、それに加えて何よりもまず想像したり分析する頭脳と、表現する身体の間でコミュニケーションが確立されねばならない」⁹⁾と述べている。様々な動き、身体表現を通して音楽を学ぶことは、保育者を志す者にとってより豊富な音楽経験をもたらす、必要とされる音楽能力の育成の一助を担っていると考えられる。今後も引き続き、事例研究を積み重ねていきたい。

註

1) 伊藤仁美(2008)「保育者養成における音楽的表現

授業に関する一考察—動きを通して音楽を学ぶことの
効用と課題—」、日本ダルクローズ音楽教育学会
編『リトミック実践の現在』、開成出版、pp.61-66

- 2) 伊藤 (2008) 前掲書
- 3) エミール・ジャック＝ダルクローズ (1975) 『リズム
と音楽と教育』板野平訳、全音楽譜出版社、(ジャ
ック＝ダルクローズ、1975、p.50)
- 4) エミール・ジャック＝ダルクローズ、前掲書 3、p.52
- 5) エミール・ジャック＝ダルクローズ、前掲書 3、p.54
- 6) 明星大学通信教育学部2009年度夏期スクーリングシ
ラバス
- 7) 神原雅之編著、伊藤仁美他著 (2008) 『世界の歌を
遊ぶリトミック・ゲーム67選』、明治図書、pp.18-
22、pp.64-66
- 8) エミール・ジャック＝ダルクローズ、前掲書 3、p.66
- 9) エミール・ジャック＝ダルクローズ、前掲書 3、p.64